

《正岡子規（36）の続き》その288

平岸 三八

「病床六尺」（明治35年6月25日）において、子規は言う。

警視庁は衛生の為といふ理由を以て、東京の牛乳屋に牛舎の改築又は移転を命じたさうな。そんなことをして牛乳屋をいぢめるよりも、寧ろ牛乳屋を保護してやって、東京の市民に今より二、三倍の牛乳飲用者が出来るやうにしてやったら、大に衛生の為めではあるまいか。

子規は「仰臥漫録」に記されているように、牛乳愛飲者であつて、牛舎の不衛生よりも、牛乳飲用者の増えることが重大だと、その方の衛生的なことを云っているのだ。

牛舎改築のことは、左千夫から聞いたに違いない。市中にある牛舎だから、そう大規模なものではないにしても、改築や移転については資金その他すぐには実行に移すことは困難だったであろう。子規は公衆の衛生よりも、個人の健康を重んじる方が当時の急務だと思つていたのであろう。

牛乳飲用者が増えれば、牛乳屋のふところも自然豊かになり、牛舎の改善も従つてできると子規は漸進改良主義をとつたのだ。

俳句革新、和歌革新、写生文の提唱など、子規はかなり急激な主張もしたが、ある点では漸進的でもあつた。

左千夫は命令だから、違反することは許されぬと、35年7月上旬には牛舎の改築を行つた。

お上の命令よりも恐ろしいものは自然の災害であつた。

左千夫が牛乳搾取を営んだ本所区茅場町三丁目（現・墨田区・江東橋三一五）は低地であつて、附近の河川の氾濫によつて、しばしば洪水に見舞われたことは、本稿（八百八十八）以降に詳述した。その年度を記せば、明治33、35、36、40、41、43、44、45年と、殆んど連年といつてもいらい水害の被害をこうむつた。なかでも明治43年の洪水は未曾有のもので、8月から11月にわたつて水が引かず、致命的損傷を被つた。

45年5月末には、牛舎を府下大島町字亀戸に移築し、大正2年3月には、茅場町の家も売り、居も亀戸に移した。

左千夫夫婦には四男九女が生れた。ひとりには池に落ちて死亡したが、結局成長したのは女子八人のみであつた。明治41年にはまだ7人だけだったようで、「両親の四つの腕に七人

の子を掻きいだき坂路登るも」の作がある。多くの子供を抱え、生活に苦闘するさまがしのばれる。

子沢山、水害などのなかにあつて、左千夫は歌の道に精進した。子規の死後も、歌誌「馬酔木」（明治36年9月〜41年1月）、「アララギ」（明治41年10月〜つい数年前廃刊）において、斉藤茂吉、島木赤彦、土屋文明などのいわゆるアララギ派の俊秀を育てた功績は大きい。

小説においても「野菊の墓」（明治39年）、「隣の嫁」（明治41年）などを書いた。夏目漱石は、左千夫宛の手紙（明治38年12月29日）で、「野菊の墓は名品です。自然で、淡白で、可哀想で、美しく、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい」と読後感を伝えている。

「野菊の墓」は「ホトトギス」明治39年1月号に載り、それが前年の12月に発行になつていたので、それを読んだ漱石が、直ちに左千夫に手紙を書いているのである。

明治43年5月、宿願の茶室唯眞閣が成つたのは、無上のよろこびであつたに相違ないが、連年のような水害を被る土地に茶室を建てるとはどういう気持だったのだろう。子規の前に茶釜を持参して茶を点てて子規に服させるなど茶に対する趣味は深かつた。

全集全九巻（昭51〜52年、岩波書店）があつて全著作を読むことができる。